



古今
說

卷一

海

南



13
1616
3



へ 13
1616
3



大徳

今古小説唐錦卷之三

醉墨散人盜魁を捕る話

相逢盡道休官去林下何常見一人と靈徹が賊やふ
遠くを穿ふ名刺と厭ひて隠遁する者も古より稀なり
今世は淫を稱する者多くは多病ゆて官途の初学
よたふと晴をみせて世路の強弱を掛く罪を以て人々
面を難く又今為くして善を以て苦む利欲の念
深しゆも強て強棲ふ身と強ふ後乃ち有り正守は
長崎高津小住一若井伊集の者あり忠勸意を
つゝも是ははる能為るは家懐かるといふも早なる
まて一子なく主婦多年神仲不祈誓して乞と取ら



夜寝たりり夕色に旅衣のよと寝かして名と藤井之帝
亮都と叫けり幼童の心より聰明人の御書讀書と好
十歳ありて詩と紙と文と作り歌と御書畫と善と
かりけ敷きあを群兒と集りて書紙講をふけよ又素に
よひて筆と墨と人字神童と稱しふる藤井はあふあつて
より文藝のそとにけり馬の御ふと擬し長徳の家名
良俊よの府とあつる者かたしあふ御書ふふはる何
系なら者ありあふ老母あつて御書と進く女抱りめ
我を眼かたしあふあふゆりゆりも御書と進く女抱りめ
猫と御書を母とあふあつてけり猫を母と書くと老母の
あふあつてけり猫を母と書くと老母の

ついでに帝も婦人の御書と感ふるふ之帝御書と
信じて平生姑嫁の同じまじり中同ふまてあふ
してあふ姑と婢僕のおくあつてけりけりけりけり
之帝御書とあつてけりけりけりけりけりけり
とあつてけりけりけりけりけりけりけりけり
夫よ若知をてあつてけりけりけりけりけり
ら何小妖獣と殺り事と疑く又児女は徒かたけり
怪談と古くけりけりけりけりけりけりけり
も信じてあつてけりけりけりけりけりけり
あつてけりけりけりけりけりけりけりけり
罪と信じてあつてけりけりけりけりけり

とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃

亮都八年事と十六歳より年長でけりる女計事
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃
とらぬる女計事世と欺んともるる世と誰なる流石女乃



唐金

改申せし取内とあるふた冊に幾深かりき金とあり一冊と
 傍書の林下座ありたるまでお印しく村室と記しと
 する時松葉の合部裏ありけし拷問及ぶといふ賊首なる
 るゆめりきとありし能書もことごとく捕りて一糸に糸にて
 繋首ありしは法人如て寺院のふいさうにあらわし人取人同
 て向かり希代の城を洛中に住しと人取さしは成徳の
 者こと更ふ身とを如らみして尺取中くうふ人取
 曰古人の説は宝貨を多く蓄む事と凡そ乃お取らりて
 為しとあり我らも此も信書生ぐ屋上と尺取お取人取
 しくおとれりけし人取しとふいおとれりてははる遠に
 さまだかりし破屋お宝貨の多るるをさおとれりて曰お入る書

生とるるに偷盗とありのおおとれりて一冊の世と證
 くと御首ありし序を如くありて竊る序に忠ひ入る信書
 のおとれりてありひして頼の刀金尺書生る事お取本と裏
 ありと堀と飛紙出るゆめりきとせんおとれりて堀ありとれり
 新とまの堀と堀りて後馬の事堀と堀りたりと新とせん
 夫ひゆめりきとありふ入る堀と堀りたりと財室とありせ
 中小城堂の名と記し一冊ありとそそ堀りたりと堀
 ありしかりし堀りたりと堀りたりと堀りたりと堀りたりと堀り
 の黄金百枚と堀りたりと堀りたりと堀りたりと堀りたりと堀り
 ありしと堀りたりと堀りたりと堀りたりと堀りたりと堀り
 といはるるは堀りたりと堀りたりと堀りたりと堀りたりと堀り

西名ぐと仲坊もも教へん

とくろうよのふと記く多度誰人の懐きに中ゆく
思ひつゝ念ふうむま

秋の萩の月

と下乃白と付く獨り身と僅し幾くもなる後より
女の夢めく風小籠舞とらししとく色あはれとせ
まの世解りくさむひの小面く下乃白とけもあふ
風よ玉れまるとそとそとく君いひきり小伝多
あはれと回して看まざる小淨満たまさきとて
玉色姫婿とら二八つれ婦人として月下に獨り
婦人の三人ありしやとく暁花とてまじりて

系は生田の巻く小伝花も或はとそさる君は誰人の息女
同女名と合て袖小面と度ひ自らひさるから姉き氏の婿
よとくも知らわきをほくお思ふとそさるたとあふ
之神はつらつらとて何とぞいふの妻と女はつらとそ
今宵も月れ隈かたふらしては雨小傳り小君とそ
いとあたまよこのはらふ今たあつとあふとそ
女乃神と目とれ祠とりすつとてかきと名ひたま
はるるあふ人きとく女は傳りよとて一は女は傳り
あひあつとる指すはひゆりもさる或ははるあを
あひあつとる指すはひゆりもさる或ははるあを
あひあつとる指すはひゆりもさる或ははるあを
あひあつとる指すはひゆりもさる或ははるあを



歌のりく又御身も若く水も多うに家く交る事なりしは
 女もたふ小ぢりた君い或初夜中てなままび中く同小物うとそま
 女流と流しは母めて再ひ書ふまうゆらゆらまうと流し世に
 小御書ひてうしなふまう此妹も流るふ或初夜中て
 續と解やうて乃ける赤石の浦中て入水のちうふ小書枝よ夜と
 抄の又女が簪と海産う拾ひよまむるんかかると
 今まう思ひ扱めらふいりる所そは所はあうや御女の
 曰一旦君と二世の如らひとかともいふも父母れ怒り強
 女のみひ治りてまういふ御人送ん人の思ひたま
 亂文めし女の操ふそむく世うのあまう不孝れ罪と
 いとま海小治りしうらまんとあ書ふんあてまう

赤石の浦は小死入ふお言船の干かまう水浅く海ひり
 海賊も思ひ取らうた男船もあまうに我を引くか
 上は海舟うらと舟んで我を御ふけいりうお書ふ書んて
 小書寫しの信ふ成とあくあて竊ふまやとある者あう
 とゆる者あう一だ幸ひてと櫃のてれ物よ書てらふ
 小書とひまのまううと信ふまうは中書もまう
 子書いひらうけく信と始の信いりらうとふまう
 ともゆは流ふお書ようけらまうはあうて又の
 小書と信ふまうと今とらん水のみまう
 つけま書まふ書と強く書まうりう死せんか
 小書と信ふまうかうとまうとまうとまうと

